

子供の繪 其二

菅原 教造

八

子供の繪の話の續きです。前號では、本筋の話をする上に邪魔になるものを片付けるのに、相當長くかゝりました。氣のついた人は考へ直して頂きませう。すべてのごきは、解つて見れば、それは如何にも解り切つた事で、何の變哲もない、ごく平凡なものです。「なーんだ、こんな事に今まで引つかゝつてゐたのか」と言つたやうなものです。實は自分で苦んで、その引つかゝつてゐる點を、皆さんが搜し當てなければならぬのです。そして「成る程、さうか」「ア、こゝだ」と自證しなければならぬんです。それを、自分で苦勞もしないで、ものごきを他人の話で聽いて、さてぎれだけそんな事が皆さんの身に泌みるか……今更らそんなごきをこゝで考へたつて仕方がありません。ぼつ／＼始めませう、獨白です。

(七) 人ご自然——本號では、子供の繪の話をする土臺になるものを述べて見ませう。項目は「人ご自然」です。

初めに「向う側」の話をして見ませう。そこに大きな意圖がある、大袈裟に言へば、それは天意ごも言ふべきものです、道理です、道です。比喩的に言つて見れば的(め)です。はつきりした的(め)が立つてゐるのです。

次に今度は、「此方側」の立場の話をしませう。やはり比喩的に言つて見るに、矢を弓に番へて、的に狙ひをつけて、切つて放つ迄の氣持さいふごきです。もう一步突込んで言へば、切つて放てば、確的に中(あた)るごきを見透しです。さういふ確認(けんたう)です。決して外れるごきのない見當(けんたう)です。直覺(ちかく)ご言つても洞察(めいさつ)ご言つても明智(めいち)ご言つても達識(たつし)ご言つてもいいでせう。

これは、たゞ一筋の氣持、即ち一向專念の氣持で、しかも成心のない虚無の心境ですから、一念を言つても、純心を言つても、初心を言つても、無心を言つてもいゝでせう。この氣持は、普通の人から見ると、人間離れがしてゐて、人間の意圖即ち雜念が見えない氣がするものですから、無意識を言つてもいゝかも知れません。しかし何を言つても、やはり人間のすることですから、これを言ひ直して無意識的意識を言つた方がいゝかも知れません。

次に、「向う側」を「此方側」の現はし方を一つにまごめて見るに、天來の斷案又は素の心言つていゝでせう。自分のしてゐる事でしかもそれは自分のせいでないといふ氣持です。これが人間を言ふものです。

この天來の斷案、この素の心は、人間でゐて人間離れのした心境、即ち道の氣持ですから、たまへ自分に解つてゐる意識されてゐるを言つても、人為の努力なしに、何をなしにボーッと解つてゐるといふ氣持です。つまり一點の坎所を抑へて、あみを放りつばなしにして置くといふ氣持です。或は坎所を誰かに抑へてもらつて、自分は全く手放して暢氣にしてゐるを言つた方が、却つていゝかも知れません。無爲の氣持です。抑へなければ全體が總崩れなのですが、フツツそれを樂に抑へてゐるのです。それですから、間が抜けてゐて、十分に尻尾を出してゐて、それでチャンと縮りのついでゐる氣持です。之は場面に見透しがつき、ものが片つ端からかたづいて澄み切つた水面には一漣の波紋もない時の氣持です。

しかし人間の事ですから、時には水が濁つて渦をまいてゐるこゝもあるでせう。さういふ時には、行くの的の見當がつかません。随つて、ものはジーンと置いてゐないで千變萬化するのみならず、自分の態度もやはりいろいろに動きます。一體その道にやらのふものが、有るのやら無いのやら、向うに當てがなくなつた途端が、ものも動き、自分も動く瞬間です。その時には、大地がグラグラッとする時であり、何を何遍考へて見ても、何を何度作つて見ても、一體それがいゝのか、わるいのか、さうしても解らない時です。

さうせ人間のする事です。的はチラついてゐるだけです。實は何をしても半端なのです。未完成なのです。濁流に漂はされるのは、寧ろ當然の事言つていゝでせう。しかし考へ方によつては、これは人間に與へられる光榮なる未完成です。何故か言へば、完成さば人間離れのした瞬間の悦びであり、ほんの一瞬の閃きであり、次に瞬間にはまた、人間本來の汗と血と涙の世界が待ちうけてゐるからです。

このやうに人間は半端なものですから、そのために初一念の追求があるのです。未完成であるから、涙ぐましいほどの無限のやり直し、血の出るやうな果てしのない反復が必要なのです。これが人間の修業です。

かうして苦んでゐるうちに、思ひがけないいろいろのものが生れて來ます。思ひがけないものは、追求して行く一面・一場面の變化が教へてくれて新しい世界です。さういふ風に、つまり向うから招いてくれるのです。氣がついて見るご、何處か向うから呼ぶ聲がするのです。それに牽かれて、思はず知らずフツツ一步踏み出します、その途端に、今度は此方から、「あゝこれだ」いふ叫び聲が出て來るでせう。

ものゝ極意ごくいをこくあつさり言つて見れば、何でもいゝから、一つ思ひ切つてぶつかかる事です。思ひ切つて眼をつぶつてぶつかれば、ぶつかつてから眼を開いて見れば、必ず何か手懸りが見つかるものです。それを繰り返してゐるうちに、ものゝ呼吸が解つて來ます。そうなればもうしめたもので、それから先きは、ぎん／＼カスを捨てるこゝが出來ます。いや、カスばかりではありません。自分の最上と思ふものでも、思ひ切つてそれを捨てるこゝ、もつ／＼良いものが得られるのです。

これがものに臨んで見透しのついた氣持です。幾千幾萬の起り得べきあらゆる場合を、ぎん／＼ぎん／＼振り分けて、たつた一つの要を掴んだ氣持です。出來上つた結果からその經路を理窟で言へば、失敗すべきあらゆる場合をぎん／＼取り除けたたつた一筋の狭い道です。又これから起るべきものに面を向つた氣持から言へば、これより他に往く道がないこゝ

いふ事が、解つてゐるこいふ氣持です。

右に述べた事を一括して見れば、「人間ミは何ぞや」こいふ問ひに對する答へになつてゐる筈です。子供の繪の話をするのに、何故に人間ミいふ大きい問題を持ち出したかこ言ひますミ、實は繪ミ言つても、人間ミ言つても、又は道ミ言つても、つまりは同じ事であるからです。

この點を明らかにするために、次に「自然ミいふ問題を新たに持ち出して、考へて見ませう。一言で言つてしまへば、自然ミ言ふものは、人間の修業の機關だミ考へたらいゝでせう。自然は謂はゞ大きな幻影であり、素材であり、人間ミ不即不離の關係に立つ模型のやうなものです。それですから、實は有つて無いものなのです。たゞ人間がそれにぶつかつて行く稽古臺にする時だけ、自然が活きて來るのです。この人間の稽古の仕方にもいろ／＼ありますが、その何れにしても、自然ミいふものは思ひ餘つて困つてゐる時の人間の道場であるこいふ事には間違ひはありません。

次に若い登山家の話を紹介しませう——「山に登る人は、山の氣に合せて氣息を正し、山の狀勢に合せて體の動きを正さなければならぬ。けわしい石道を登る時は、坂の一つ／＼の石に従つて、それに調子を合せて體の調子を取りながら、足許を見詰めて一步々々を確實に眞剣に踏みしめて行く。この點に山に登る人の全生命が懸つてゐる。要するに、山に従へば従ふべき人の行路が樂になる。山の美しさは、この苦行の完成を織り込んだ想ひ出さして、家に歸つてからしみ／＼ミ噛みしめるやうにして味はへるものである。つまり登山の全體の味は、山にひれ伏す氣持にある。」

この現代の若い人の話の中に、實にいろ／＼のものが含まれてゐる事が解るでせう。自然を權威の世界、運命の世界ミして考へる事がその(一)です。自然を視界ミして、向うに見える美しいものミして考へるこミがその(二)です。自然を科學

的原理の世界として、物質の法則の世界として考へる事がその(三)です。自然を天地の道理として、人間性を解脱する道として考へるこゝがその(四)です。

〔第一の考へ方〕は、原始人や古代人の持つやうな素朴な歸依・崇拜の氣持です。たゞて言へば、到底人間には持ち切れない。見廻はし切れもしない寶物藏に入つたやうなもので、見るだけでも眼が眩むほごですから、勿論手にも取られないし、觸る事すら出来ないでせう。この壓倒された氣持、解釋し切れなさの充満から來る思ひ餘つた氣持のたつた一つのはげ口は、自然を人間生活の兆き見て、ひれ伏してそれに縋りつくより他に道がないでせう。

〔第二の考へ方〕は、近代人が繪のやうに自然を鑑賞する氣持で、自然を藝術的に即ち文化の一部き見、自然を生命き考へ、人間き共に呼吸するものとして感ずるのです。この見方は飽くまでも人間が主人公であつて、自然を人間化する立場です。しかし一方に於て、人間が思ひ餘つて自然を禮讚する原始時代からの癖がやはり残つて居ります。それですから、さうかするき、人間が主人公になり切れずに、困つた時の暗示として自然に對します。かうして絶えず自然から何かを取りながら、絶えず自然を變化してゐるのです。自然は人間によつて生かされてゐながら、又人間を生かす道にもなつてゐるのです。畫家が作品のモデルとして自然を見るのもこの氣持です。

〔第三の考へ方〕は、自然を科學的文化の模型き見る事で、自然はこの場合には物質き言ふ事になります。それですから、自然科學き言ふのは物質科學き言ふ意味なのです。この考へ方は、一旦は自然を視界や聽界とする立場を取つて、色や音き言ふやうな物の性質を手懸りにするのですけれども、すぐそれを離れて、色に應ずる電磁波の振動きか、音に應ずる空氣の分子の振動きか言ふ科學上の原理を捕へ、波動の法則を自あてにします。次にこの二つの立場を比較して見ませう。色は具體的に眼に見えてゐますけれども、波動は眼で見られませんが、たゞ原理として考へられるだけです。又音は具體的

に耳に聽えて來ますけれども、波動は耳で聽かれませんが、たゞ原理として考へられるだけです。色や音ばかりではありません。此考へ方は、一旦は降る雨、落ちる木の實、水の渦巻き、雪のなだれ、枝と枝の摩擦、物と物の衝突などを手懸りにしますけれども、すぐさう言ふ視界を離れて、力の原理や運動の法則を考へます。かう言ふ物質の原理、物質の法則の世界が、自然科學と言ふ自然と言ふ事なのです。人間の身體の活動も、やはり此様な法則の世界の一つの例になります。

それですから、人は一方で味ふ人として具體的に自然の色を見、動きを見ているのですけれども、他方では自然科學として、抽象的に波動の法則や力や運動の法則を考へてゐるのです。此考へる方の態度が勝てば、物理學者や化學者等の立場になり、科學の法則の現はれさしての自然物質に對する事になります。もし眺める方の態度が主になれば、右に第二の考へ方で述べたやうに、畫家や彫刻家の立場になり、視界としての自然、作品のモデルとしての自然に對する事になります。

この二つの態度を一身に乗ね、二つの世界を際ぎい一點で支えて統一してゐるのは工藝家でせう。工藝家は、材料としての自然物、たゞは金・石・土・木などと言ふやうな物質の形態・色彩・運動などを眺めると共に、さう言ふ材料の原子的化合、分解の原理、即ち材料を加工して變化する法則を考へ、材料と作意を一如一體のものごします。工藝品はこのやうに自然と人間の合一によつて生れ、この合一によつて材料と作意が共に活き、自然の秘を發いて人間が自由に新しい構造を組み立てる所に——もし自然を本位として考へるなら、この構成は再構成であると言つていゝでせう——生命があるのです。そしてこの合一が作者の體・作者の手によつて爲し遂げられる事が、工藝に於て特に眼立ちます。随つてわざと技巧か技巧と言ふ事が、繪のやうな藝術と較べて、工藝の特色となつてゐると言つていゝでせう。繪などでは、作意と技巧との間に相當の距離があつて、所謂無技巧の魅力なきと言ふ事が考へられないでもありません。工藝ではこの距離が近いのです。最も近いのは體の藝術としての踊りや劇でせう。今一端に繪を、中間に工藝を、他端に踊りを置いて、この

三つを較べて見ますと、繪から工藝へ、工藝から踊りへ移るに従つて、藝と技巧との關係が追々に直接的になり、技巧のごまかしが追々に利かなくなり、藝のよしあしが追々に剥き出しに成つて來る事が解ります。

踊りばかりではありません、工藝にしてもやはり體が大切なのです。この點から技巧の問題を、工藝の立場から申して見ませう。技巧と言ふ事は、工藝家の體や手を中心として、材料に従ひながら作意を活かす事であると言つていゝでせう。たゞへば陶工は體を以つて手を以つて、土に従ひ、ロクロに従ひ、釉藥に従ひ、火に従ひながら、作意を活かします。材料に従ふと言ふは、體を以つて自然の中に入り切る事です、自然にぶつかると、自然と取り組む事です。それですから、時には自然の威力により、材料自身の法則によつて、作家が豫期しなかつた技巧が生れることがあります。之は謂はゞ大自然の技巧であり、無意識の技巧です。此無爲の技巧から、作意に新しい作意が恵まれる事が珍らしくありません。此點から工藝は、自然(即ち物質の法則)を作家の作意の思ひ餘つた時の手本とする代表的ものであると言つていゝでせう。

〔第四の考へ方〕は、昔の支那の哲人や道士が修業したやうに、人々自然との合一と言ふ境地です。これは、人間を自然の一部と見る事、人が自然の中に入り切る事です、人間を抜け出して、その同根同元の自然に復歸すると言ふ事になります。人が自然と同じ呼吸をします。人の氣持が思ひ餘つた場合には、文化を捨てるより他に道がありません。捨てるには、文化と對立した自然に歸るより他に道がありません。歸れば眼界が新たに開けて來るでせう、自然は人間を離れる道場ですから……

人間の文化を離れて自然と合體するにしても、この考へ方にいろ／＼の階段があります。初めの階段は、人間が自然と言ふ道場に入るつもりでも、入り切れない場合です。入り切れないと言ふのは、一人の人が二た役を勤めるからです。一方で人間が自然と合體して自然の中に入つてゐるのですが、他方でそれをその同じ人間が眺める氣持です。たゞへば、雄

大な景色の中に人物が小さく點出されてゐて、その畫面をその人物が更らに此方から見てゐるやうなもので、自然の中に入つてゐる事についての反省があります。それですから、この場合の自然は、實は文化を裏打ちした自然です。人間のなつかしさや親しみや愛や熱情が斷滅されてゐるやうに見えて、實は絲を牽いて残つてゐます。人間を離れたものに對する一種のあたゝかい人間的の憧憬です。この氣持がものゝあはれです。人間を捨てゝも捨て切れない思ひやりが、何處もなく通つてゐるのです。寂寞、虛無、幽玄、その中に人間らしさが毛細管のやうに泌み透り、滲み出してゐます。この心憶が、さびやわびの氣持です。文學の方の自然觀は、大抵この階段に屬するものと言つていゝでせう。美は統一と言ふ事であり、藝術觀は結局この人間的統一に立脚しますから、この意味の氣持のまごまりが、非人間的であるべき自然の隅々にまで泌み通ります。それですから、かう言ふ人間を離脱したやうに見えてゐる氣持には、やはり神經質な所があつて、つゝましやかな心づかひ、アラを出すまいとする周到さが匂つてゐます。又自分のした跡を一々顧みて片付けようとする理に詰んだものが感ぜられます。さうしても無心になり切れないからです、思ひ切つて自然を同化し切れないからです。

次の階段は、文化の反對のものとしての自然、即ち原始と言ふ事です。つまり、文化の度が少ないほご自然に近づく原始になると言ふ考へ方です。この文化の反對を言ひ現はすために、よく自然復歸と言ふ句が用ゐられますけれども、これは決して原始人を手本にすると言ふ意味ではありません。文化人としては明瞭に尻尾を出してゐる點に於て、時代の生活を超脱してゐると言ふ境地なのです。又、文化をカスミ見て、顯智即ち道を濁す所の文化を捨てるこの氣持を、生物學的本能を考へる事は禁物です。文化によつて濁された顯智を、一旦磨いて鋭くして、しかもそれを忘れるのが、この原始即ち自然復歸の根本の氣持です。

「自然は人間の道場ですから、この氣持を握りしめるためには、文化人としては、相當苦しい修業が必要です。この修業

によつて、意識から無我・忘我へ、反省から無反省へ、成心から無心・初心・童心へ、複雑から單純へ、感情から素朴へ、小心・熟慮から放膽・暢氣へ——こゝでかう言ふ字句をいくら書いても切りがありません。問題は字句の美しさにあるのではなく、この意味の自然と言ふ心境に達する人間の修業にあるからです。

原始と言つても、初めからの無文化なのではありません。一旦文化を通り越して、その文化を捨てるのが、この意味の自然なのです。たゞへば、御覽の通りちやんま遺言狀が書いてある、何時でも死ぬると言ふ虚無・恬淡の心境なんです、生きてゐてしかもカスの文化を離脱してゐる點に於ても自然なのです。何事も荒削りで、手許ががら明きであり、開けつひろげで、大ざつばで、線が太く、ものをつゝばなした所があり、こま／＼した世間の義理や人情にこだわらない、ものに捕はれない、執着がないと言ふ氣持です。しかし文化のカスを捨てた穎智がやはり何處かに匂ひ、忘れたものゝあはれがやはり何處かに隠れてゐて、抜けられないものがあり、何と言つても何處かに巧まない巧みが見えます。これがよく現はれた場合が、折れる・碎けると言ふ人間の味であり、わるく現はれた場合が、あきらめの氣持です。

第三の階段は、文化の否定としての自然です。文化の反對の原始では、まだ／＼生ぬるいからです。否定に反對とは違ひます。たゞへば、白の反對は黒で、中間に鼠色がありますが、白の否定は非白で、中間に何もありません。生の否定が即ち死で中間のないやうに、文化の否定としての自然と言ふ事です。人間の修業にはいろいろの道があるでせう。随つて世間の人は、それ／＼前人の修業の眞似をする事が出来るでせう。しかしこの意味の自然、即ち生を否定し文化を否定する事によつて、人間性を脱却する修業の立場には、恐らくは滅多に追従者がないでせう。しかも問題の中心點は、この追従者のなさ／＼な所に、生死の間の髮の毛一筋の所に、この氣合ひに、懸つてゐるのです。

道に入るのはいい事なんです。しかし入りつ切りで抜け出る事を知らない人には、この氣合ひは解らないでせう。これ

は、たゞへば死地に入り切つた塗端に生を掴む呼吸です。何ミなれば、ものが終つた時が、新しいものが始まる時なんですから。これは不可能の一瞬を掴んで可能ミし、否定の一刹那を捕へて肯定にする捨て身の態度です。人間の文化を捨てると言ふのは、もごく文化はカスですから、しかも總てを知り盡してゐるのですから、捨てるのです。しかもその捨てた瞬間に何かを掴むのです。これまで人間が到達した型ミ言ふ型、あらゆる型を破り盡すのですが、その代り、どんなものにもなれる大道を掴んでゐるんです。この大道は至道無爲で、何にもしてゐないやうなんです、この虚無の一點に立つ言ふ事は、實は無盡藏の大きな世界を控えてゐる事なんです。かうした道は、道の道であり、言葉では何ミも現はしやうがないんですが、永劫の道であり、嚴しい・正しい・肅然たるものなのです。

この大道から見れば、愛ミ憎み、之はもごく一つのものです。大きい、強い、廣い、深い、荒つばい——さう言ふ片つ方だけのものを握りしめてゐて、それが何になるでせう。輕妙・洒脫・滑稽・何ミ言ふ間の抜けた氣持でせう。機智・諷刺・ユーモア、何ミ言ふ狭い路でせう。ものの哀れ、ものの哀れに浸り込んでゐてさうします。さびやわび、何時迄もそれに懸り合つてゐたら何ミ言ふセンチメンタルな氣持になつてしまふ事です。ものを掴む、夫は掴んで放す刹那の味です。ものが解る、もし解り切りになつてゐたら腐つてしまひます。何故すぐそれを捨て、次のものに飛びつかないんです。

天地ミ冥合し、宇宙ミ合體し、自然ミ一加ミなる、文辭は堂々たるものですが、要するに、それは、文化の否定ミしての自然ミ言ふ事です。死に入つて生を掴む人間離脫の氣合ひです。人間修業の立場ミしては、考へ方の徹底さから言つて、これ位深刻な——深刻ミ言ふよりも、もの凄い、冷酷な、無殘な立場はないでせう。しかし透徹すれば、さうしても、これまで來なければならぬのです。